

バークガフニさん新著

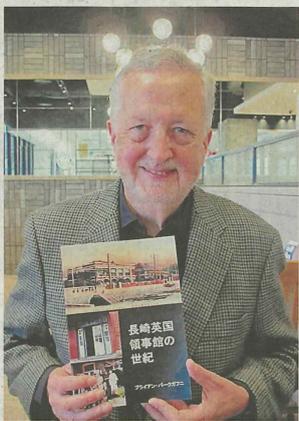
# 「長崎英国領事館の世紀」

長崎の外国人居留地研究の第一人者、クラバウ園名譽園長のフライング・バークガフニさんが、新著「長崎英国領事館の世紀」を刊行した。幕末の「安政の開国」により開港した長崎に、外国人の滞在エリアとして設置された「外国人居留地」。その中でも中心的な存在だった旧長崎英国領事館の変遷や時代背景、領事ら関係者の逸話を網羅的にたどった一冊となっている。

旧長崎英国領事館を巡って 貿易港長崎、居留地の栄枯盛は、1908(明治41)年に 衰を見守ってきた。

建てられた赤レンガ造りの建物が現存。戦後、長崎市が取得し、美術館などとして活用。明治後期の洋風建築として高く評価され、90年に国の重要文化財に指定されているが、バークガフニさんは「建物だけでなく、領事館がどのような役割を果たしていたのか、歴史的意義をもっと知ってほしい」と話している。

駐長崎英国領事は領事代理、名誉副領事を含め延べ37人に上る。バークガフニさんは特に印象深い人物として、大正期の1920、24年に領事を務めたオズワルド・ホワイットと、27、41年まで最後の領事を務めたフェルディナン・ド・C・グレートレックスをネットワークの結節点として挙げた。



新著を手に「長崎の歴史活用の一助に」と語るさんバークガフニさん 長崎市内

## 「歴史的意義を知ってほしい」

「グレートレックスの日記が行方不明になっているなど、英国領事館についてもまだまだ新たな資料の掘り起こしはできる」とバークガフニさん。「長崎は歴史遺産の活用が十分なされていない。どんな人が住んでいたかを考え、どう生きたのか、そうした歴史的エピソードが軽視されてきた。歴史学者としてもっと発信をしていきたい」と話す。

現存する旧長崎英国領事館は、老朽化に伴い2015年度から進められてきた保存修理工事が完了し、今月30日に開館する。同館の歴史や旧居留地に関する資料のほか、本県ゆかりの洋画家・野口彌太郎の美術作品などを展示。歴史資料の監修にはバークガフニさんも関わった。

「長崎英国領事館の世紀」はバークガフニさんが運営する出版社「フライング・クレイン・プレス」刊。B5判116頁。10800円。問い合わせは同出版社(メール: flyingcrane@yahoocorp.jp)。

(小出久)



保存修理工事が完了し、30日に開館する旧長崎英国領事館 長崎市大浦町